

「わたしを求めて生きよ」

アモス書 5 章 21-24 節。

「わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときの香りも、わたしはかぎたくない。

たとえ、あなたがたが、全焼のささげ物や穀物のささげ物をわたしに献げても、わたしはこれらを受け入れない。肥えた家畜の交わりのいけにえを献げても、わたしは目を留めない。

あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。あなたがたの琴の音を、わたしは聞きたくない。

公正を水のように、義を、絶えず流れる谷川のように、流れさせよ。」

はじめに

アドベント 2 週目を迎えました。イエス・キリストを待ち望むときを過ごしています。ろうそくに灯される光も 1 つ増えて、2 つの光となりました。クリスマス礼拝が近づいてきています。

「さて、私は本当にイエス・キリストを待ち望んでいるのだろうか」、「このままクリスマス礼拝を迎えて良いのだろうか」と、私はアドベントを迎えてから色々と考えてしまいました。

忙しい日常の様々なことに心を奪われて、イエス様を待ち望む思いがどこかにいってしまったような。あるいは、日常のやらなければならない TODO リストのひとつに礼拝ということが紛れ込んでしまっているかのような感覚になってしまっているようだからです。

このままでは、スーパーに娘のおむつを飼いに行くのと同じような感覚で、教会にクリスマス礼拝をささげに行くことになるんじゃないか。

それは極端で言い過ぎかもしれないと思いながらも、いやむしろ言い過ぎではなくて、もっと悪いことにクリスマス礼拝よりも日々の生活を優先するかのようになっているのではないかとも思うのです。

そして、これでも良いだろうと思ってしまう自分の不信仰に気づきます。それだけでなく、自分ことだけで精一杯で、家族や社会や政治、他者に対する無関心、愛の無さにも気づくのです。

そのようなことを悶々と考えつつ、聖書を開いて読んでみます。すると旧約聖書の時代のイスラエルの民も同じように見えました。

主なる神様からその心が離れてしまっている人々の姿があります。日々の生活に心を奪われ、今が良ければ良い、自分さえ良ければ良い、神さまへの礼拝も形だけです。いつの時代であっても不信仰と他者への無関心があったようです。

最初にアモス書の言葉をお読みしました。北イスラエルの預言者アモスの言葉です。アモスの言葉を通して、主なる神様がこの世の人々の姿を見て、強烈な拒否反応を示されています。

1. こんな世界に

1-1. 預言者アモスの時代

預言者アモスは、「公正を水のように、義を、絶えず流れる谷川のように、流れさせよ」と語りました。ですから「公正と正義の預言者」とも呼ばれます。

当時の北イスラエルの王はヤロブアム2世でした。その頃の北イスラエルは、外国から攻められることもなく、それゆえに、平穩に日々の生活を送ることができました。作物や家畜を略奪されることもなく、豊かさがありました。

北イスラエルの歴史の中で、最も物質的に繁栄した、ある意味では全盛期だったと言われます。

人間的に見れば恵まれている時代、平和な時代になぜアモスは預言したのでしょうか。恵まれているように見えても、平和が訪れたかのように、表面的には良さそうに見えても、現実的には人々の間で富の奪い合いがあり、豊かになったようであっても、貧しさが存在している。人間の欲望と悪があふれている世界がそこにあったのです。

物質的な豊かさと欲望があふれる現代社会と同じように、北イスラエルの人々の間にも、一部の人々の贅沢な生活があり、多くの貧しい人々の存在がありました。貧富の差が激しい、いわゆる格差社会であった。格差があり、差別があり、社会正義の欠如がありました。不正な裁判や権力の乱用だけでなく、この世の利益のために、異教との妥協、偶像礼拝が当たり前になっていた時代でした。主なる神様への礼拝よりも、この世の楽しみ。他者への愛ではなく、自分の利益を求める人々の姿があったのです。

1-2. 私たちの生きる時代に

そのような正義のない世界は、預言者アモスの時代だけではありません。

「正義がなければ、王国も盗賊団と異なるところはない」

5世紀初めのアウグスティヌスの言葉です。

『神の国』という著作のなかでこんなやり取りが書かれています。

アレキサンダー大王に捕らえられた海賊が堂々とそして皮肉を込めてこう言います。

「陛下が全世界を荒らすのと同じです。ただ、わたしは小さい舟ですので海賊と呼ばれ、陛下は大艦隊でなさるので、皇帝と呼ばれるだけです」

そして、アウグスティヌスの言葉としてこう続くのです。「正義がなければ、王国も盗賊団と異なるところはない」

そのような不正義は現代にまで至っていると言えます。現代風に言えば、「正義がなければ、国家も政治も経済も盗賊団と異なるところはない」というように言えるかもしれません。

「正義がなければ、国家も政治も経済も盗賊団と異なるところはない」

富める者は合法的にさらに豊かになり、貧しい者はその貧しさのゆえに犯罪者のように見捨てられてしまうような世の中です。

最近では気候正義という言葉も聞くようになりました。正義ということが、国家内の問題だけでなく、世界全体の問題となっています。人間社会の問題だけでなく、地球環境に影響を及ぼすほどの大きな問題となっているのです。

国連の機関が「地球温暖化は人間の活動が原因である」と明言しました。

人間の活動が悪をもたらしているのです。創世記1章において、主なる神様が造られて、「非常に良い」とされた世界を、同じく「非常に良い」とされていた人間が破壊しているというのです。

地球温暖化によって、災害が起こります。干ばつによって、食料危機が起こります。そのために、安全な土地を奪い合い、食料を奪い合い、資源を奪う合うための戦争が起こったり、さらに経済的な格差が広がったりします。そのような負の連鎖が加速するような時代、気候正義という言葉が生まれるような時代です。

人々が欲望に支配されています。世界で一部の先進国が温室効果ガスを大量に出すことで、経済発展を遂げてきたという歴史があります。今現在、世界で豊かな10%の人たちが、温室効果ガスの半分を排出しているとも言われます。

一方で環境問題の影響をより大きく受けいているのは、貧しい国や地域の人々です。

さらに、次世代への影響もあります。選挙権も持っていない子ども達、これから生まれる子ども達は、気候変動の原因を作っていないにもかかわらず、壊された地球環境で生きることになってしまいます。

しかし、正義というものは、地球規模の問題であると同時に私たち一人ひとりの問題でもあります。地球環境の問題であっても、これまでの経済を豊かにしてきた化石燃料に依存する社会を変えていくのは私たちの責任です。例えば、コストのかからない石炭火力発電が継続されているのは、安い電気を求める産業界の存在があるためであり、そしてそれは、安いものを大量に消費する私たちの存在があるからです。

世界の環境問題が、私たち一人ひとりの日常の生活、信仰生活とつながっています。私たちの生活に正義があるだろうか。信仰があるだろうか、他者への愛があるだろうか。私は何を大事にして生きているだろうか。私たちは問われています。

社会の問題は、私の抱えている問題でもあります。環境問題に限らず、あらゆる国際問題が私の問題です。世の中の問題は、人間関係や家族関係、地域のコミュニティの問題でもあります。新聞の国際面の見出しを見ますと、「主導権争い」とか、「対話が必要」とか、「一方的で問題ある行動」、「人権問題で懸念」とか毎日のように良くないニュースがあふれています。しかし、国同士のニュースが個人的な人と人の関係、家族の関係にも当てはまるなと思います。

もし、〇〇ファミリーの家族新聞というものがあれば、国際面と変わらない見出しが1面トップになるかもしれません。「夫婦間で主導権争いが勃発」とか、「親子間で対話が必要」とか、「人権問題で懸念」というような問題が、大げさかもしれませんが身近な人間関係でも起こっています。家族新聞の記者かいて、石田家の取材に来たら大変なニュースが表に出してしまうかもしれません。

1-3. 預言者アモスが語ったことば

今だけ良ければ良い、自分だけ良ければよいという人間の罪深さがあります。預言者アモスの時代も、そして現代においても、豊かになったにも関わらず、他者に対する無関心ゆえに、争いが起こり、貧しさが生まれてしまいます。

預言者アモスは、「公正と正義」という言葉を使って人々に語り続けます。あなたがたはなぜ、自分のことばかり考えて、日々の慌ただしさに心奪われて、あらゆることに無関心になっているのか、何か大事なものを忘れていないか、と問い続けるのです。アモスは、鈍感な人々に対して「この言葉を聞け」と強い口調で何度も神のことばを語ります。

アモス書3章1節。

「イスラエルの子らよ、聞け。主があなたがたについて告げた、このことばを。」

まずアモスは、「イスラエルの子らよ」と呼びかけて、あなたがたは一体何者であるかを教えようとしています。あなたがたはイスラエルであって、主なる神様によって生かされる民ではないか、そのことを忘れてはいないかと、人々のアイデンティティを思い出させようとしています。

イスラエルの民は主なる神様にとって特別な存在でした。主なる神様の愛ゆえに、イスラエルの民がどんなに不信仰におちいったとしても、エジプトから救い出し、約束の地へと導かれました。

にもかかわらず、イスラエルの民は豊かさの中で、神様の愛とあわれみを忘れ、神のことばを軽んじて、日々の生活に忙しく、自分勝手に生きていました。

アモスはそのようなイスラエルの罪深い生活に対して、悔い改めを呼びかけ続けました。イスラエルの民こそ、主なる神様の愛とあわれみをあらし、公正と正義をよにもたらず存在として期待されていたのです。

イスラエルの父、信仰の父アブラハムに語られた言葉があります。

創世記 18 章 18-19 節。

「アブラハムは必ず、強く大いなる国民となり、地のすべての国民は彼によって祝福される。

わたしがアブラハムを選び出したのは、彼がその子どもたちと後の家族に命じて、彼らが主の道を守り、正義と公正を行うようになるためであり、それによって、主がアブラハムについて約束したことを彼の上に成就するためだ」

アブラハムの子孫としてイスラエルの民は、世界の祝福の基となる器として、そして正義と公正をもたらす存在として、確かに期待されていたのです。

しかし、イスラエルの民はそのような自分たちのアイデンティティ、存在理由を忘れてしまったようです。ですから、続けてアモスは語ります。

アモス書 4 章 1 節。

「このことばを聞け。サマリアの山にいるバシヤンの雌牛どもよ。」

主なる神様は、愛と期待のゆえに、イスラエルの民に対して、「バシヤンの雌牛」呼ばわりします。「サマリアの山にいるバシヤンの雌牛どもよ」。

このとき実際に、サマリアのバシヤンには肥えた雌牛がいたようです。あなたがたは、肥えた雌牛のようであると言われるのです。

弱いものを虐げて、食べて寝るだけのような怠惰な生活をする人々がいたのでしょう。あなたがたはイスラエルの民ではない、肥えた雌牛だという主なる神様の痛烈な批判です。そのように墮落してしまったイスラエルの民に対してアモスは哀しみの歌、哀歌を歌います。

アモス書 5 章 1 節。

「イスラエルの家よ、このことばを聞け。私はあなたがたについて哀歌を歌う」

このままでは、祝福の民イスラエルが滅びに至ってしまう。主なる神様が愛する人類、そして世界の不幸を哀しまれるのです。主なる神様が人々を愛しているにもかかわらず、人々の心は主なる神様から離れ、自分の利益のために弱い者や貧しい者を虐げ、不正義を行っている。そんな人々のささげる礼拝を喜ぶことができないのです。

2. イエス様が来られる

2-1. 回復の預言

しかし、主なる神様は人々の罪と不幸を哀しみながらも、愛ゆえに見捨てることができません。ですから、繰り返し、「わたしを求めよ」と呼びかけるのです。

アモス書 5 章 4 節。

「主はイスラエルの家にこう言われる。「わたしを求めて生きよ。」

アモス書 5 章 6 節。

「主を求めて生きよ。」

主なる神様は、イスラエルの民、愛する民との関係の回復を望んでいるのです。そのようなことを考えますと、イスラエルの民のささげる礼拝に対する強烈な拒否反応は、主なる神様の愛の裏返しではないでしょうか。私に心を向けてほしい、形だけの礼拝ではなくて、自分たちだけで騒ぐような礼拝ではなくて、私を心から礼拝してほしい。あなたがたを愛しているこの私を、あなたがたも愛してほしい。そのような主なる神様の願いがあふれているのではないかと思います。

アモス 5 章 21-24 節

「わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときの香りも、わたしはかぎたくない。

たとえ、あなたがたが、全焼のささげ物や穀物のささげ物をわたしに献げても、わたしはこれらを受け入れない。肥えた家畜の交わりのいけにえを献げても、わたしは目を留めない。

あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。あなたがたの琴の音を、わたしは聞きたくない。

公正を水のように、義を、絶えず流れる谷川のように、流れさせよ。」

ヨハネの黙示録にも「あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい」(3章15節)という言葉がありますが、主なる神様は中途半端な信仰を嫌われるお方のようなようです。「私を心から礼拝してほしい」そのような主なる神様の熱い想いが伝わってきます。

ここでアモスは、わざわざ、「あなたがたの祭り」、「あなたがたのきよめの集会」、「全焼のささげ物」、「穀物のささげ物」、「肥えた家畜」、「あなたがたの歌の騒ぎ」、「あなたがたの琴の音」と7つのことを列挙しています。それには意味があって、完全数の7ということで、イスラエルの民の礼拝を完全に拒否している。という主なる神様の態度が表わされているとも言われます。それは神様の本気の態度です。

ここまで本気でイスラエルの民を導き、本気で祝福をもたらそうとしているこのわたしに、あなたがたも本気で応えてほしいという主なる神様からのメッセージです。私とあなた方の関係は中途半端なものではなく、全てをかける関係であるべきであって、そうであってほしいという主なる神様の願いです。

そして、主なる神様は、熱く本気にイスラエルの民に対する愛を現されます。変わろうとしない、変わることができなくなってしまったイスラエルの民に代わって、主なる神様ご自身が罪と欲望にまみれた世界、荒れ果ててしまった世界を回復させるというのです。

アモス書9章14-15節。

「わたしは、わたしの民イスラエルを回復させる。彼らは荒れた町々を建て直して住み、ぶどう畑を作って、そのぶどう酒を飲み、果樹園を作って、その実を食べる。わたしは、彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが与えたその土地から、もう引き抜かれることはない。——あなたの神、主は言われる。」

主なる神様ご自身が、「人々の心と環境を回復させる、立て直す」というのです。一方的な恵みです。人々は自分ではもう立ち直ることができない程に墮落してしまっている。だから、主なる神様が立て直すというのです。

イザヤ書9章7節でも預言されています。

「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」

人々の信仰ではなくて、万軍の主の熱心によって、ひとりの王が与えられるというのです。その王は、平和の王であり、正義をもたらす王です。そして、その王が、私たちの主イエス・キリストです。

2-2. 神の国の福音

平和の王であり、正義をもたらす王であるイエス様は何をされたのでしょうか。

ルカの福音書 4 章 40, 43 節。

「日が沈むと、様々な病で弱っている者をかかえている人たちがみな、病人たちをみもとに連れて来た。イエスは一人ひとりに手を置いて癒やされた」

「しかしイエスは、彼らにこう言われた。『ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。』」

預言者アモスの時代もイエス様が来られた時代も、間違っただ人間的な正義がまかり通っていました。それは自己責任社会とも言えるかもしれません。自分が良ければいい、何かあったとしても、それは自分が悪い。

病を抱えている人、貧しい人々に対しても、自己責任を押し付けるような、それが当たり前になっていた社会でした。

しかし、イエス様はまず、弱い人々、貧しい人々の味方になりました。そして人々の間違っただ考え方を変え、社会を変えようとされたのです。イエス様は本気で、平和と正義をもたらすためにこの世界に来てくださったのです。

イエス様は言いました。「ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから」

イエス様は平和のために、正義のために何も行動をしない人々に代わって働かれたのです。主なる神様がイエス様を通してこの世界を回復しようとされているのです。

2-3. イエス様によって変わる

私たちはイエス様の姿を見て変えられなければなりません。イエス様によって変えられなければなりません。イエス様によって病を癒され、新しい人生の歩みが始まった人々のように、私たちもまた変えられて、新しい人生を歩み始めなければなりません。私が変わり、そして世界が変わり、平和と正義が訪れるように。

預言者アモスが語っていました。

「公正を水のように、義を、絶えず流れる谷川のように、流れさせよ」

主なる神様は乾季の干上がった川のようにではなく、平和と正義が失われた渇いた世界ではなく、雨季の川のように、平和と正義がいつも豊かにあふれる世界を造ろうとされています。

川の水は私たちを生かすものです。現代では電気やガスも同じように大事なものかもしれません。そして、それ以上に大事なものが平和と正義です。

電気、水道、ガスが、私たちの身の回りに流れています。それでは、平和や正義はどうでしょうか。私の家に、私の職場に、私の教会に、私の地域に、平和と正義をもたらすことが、イエス様によって新しくされた私たちの役割です。

イエス様が、病気の人や、貧しい人や、当時罪人とされるような人々と共にいたように、私たちは、他者に対して、そして特に社会の中で弱い立場に置かれている人々に関心を持ち続けなければなりません。

そして、平和や正義というものは罪深い人間によってはもたらすことができないものであり、私たちは人々の心を変え、世界を回復されることのできる主なる神様を求め続けなければならないのです。

ですから私たちは、主なる神様を求め、礼拝をおささげするのです。

3. 主を求める生き方へ！

3-1. 主を求める生きた方とは

平和と正義は、まず私たちがイエス様と出会い、主なる神様を礼拝するところから始まります。イエス様との出会いを通して、礼拝を通して、私たちは日々造りかえられてゆくからです。

主なる神様がイエス様を通して、本気で世界を回復されようとしている、私たちはそのことを人生かけて証しするのです。

3-2. 善をなすこと

主なる神様は私たちが人生を通して善きことをするように期待されています。

イザヤ書1章17節。

「善をなすことを習い、公正を求め、虐げる者を正し、みなしごを正しくさばき、やもめを弁護せよ。」

エレミヤ書 22 章 3 節。

「主はこう言われる。公正と正義を行い、かすめ取られている者を、虐げる者の手から救い出せ。寄留者、みなしご、やもめを苦しめたり、いじめたりしてはならない。また、咎なき者の血をここで流してはならない。」

アモス書 5 章 14 節。

「善を求めよ。悪を求めな。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたが言うように、万軍の神、主が、ともにいてくださる。」

しかし、私たちはそれができないのです。

それでも、繰り返し、聖書を通して主なる神様は私たちに善を行うように語りかけられます。

ローマ書 12 章 21 節。

「悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」

ヘブル書 13 章 16 節。

「善を行うことと、分かち合うことを忘れてはいけません。そのようないけにえを、神は喜ばれるのです。」

ですから、私たちは主なる神様を求めるのです。主なる神様を礼拝するのです。

礼拝を通して主なる神様が働かれるからです。主なる神様は私たちを造り変え、私たち人間関係を作り変えられるお方です。

主なる神様は、私たちの家族を立て直し、私たちの住む世界を立て直し、全てを回復させることのできるお方だからです。

3-3. 社会を変えるために

私たちは、自分のことばかりではなく、平和と正義のために他者に関心を持つ者でありたいと思います。そのように造り変えていただきたいと思います。イエス様の姿を証しする者でありたいと思います。

第二次世界大戦中、アウシュビッツ強制収容所での生活を体験し、その自伝的小説によってノーベル平和賞を受賞したエリ・ヴィーゼルが残した言葉があります。

「愛の対極にあるのは憎しみではない。無関心である。美の対極にあるのは醜さではない。無関心である。知の対極にあるのは無知ではない。それもまた無関心である。平和の対極にあるのは戦争ではない。無関心である。生の対極にあるのは死ではない。無関心、生と死に対する無関心である」

日々忙しい中で、自分のことで精一杯。家族のこと、社会のこと、平和や正義をもたらすことに無関心になってしまうのではなく。イエス様のように他者に関心をもって生きる者でありたいと思います。

同じく第二次世界大戦を経験し、そして処刑されることになるボンヘッファーは言いました。

「望まない信仰は病んだ信仰である。人間は、信じれば信じるほど確かな望みを抱こうとする。無限に望むことは決して恥ずかしいことではない。いつか神に会えることを望まない者が、どうして神について語るができるだろうか。永遠の平和を味わうことを願わない者が、どうして人々の間の平和と神について語るができるだろうか」

平和や正義とは正反対の戦争の最中にいた、ボンヘッファーの言葉です。

「望まない信仰は病んだ信仰である」、私たちはどんな状況であっても希望を失わずに何よりも、第一に主なる神様を求め、主なる神様を礼拝し、平和と正義をもたらすために来られた救い主イエス・キリストと共に生きる者でありたいと思います。